

社会階層と社会移動調査

私の社会学修業時代

友枝敏雄

大阪大学未来戦略機構 特任教授

「私の3冊」を執筆するとなると、私の社会学者としての研究経歴にふれざるを得ない。そこで私の研究経歴をふり返りながら、3冊の書籍をあげることにしたい。

私は今から40年以上も前に、学部で社会学を学び、その後、社会学の研究者になろうと思い大学院に進学した。社会学者としては、理論研究と実証研究の「二足の草鞋」を履いてきた。社会学の理論や学説史について文献を渉猟していると、データ分析する時間がなくなる。逆にデータ分析に熱中していると、社会学の文献を丁寧に読み、思索することができなくなるというディレンマをつねに感じてきた。しかし私がお世話になった恩師および先輩方が、すべて「二足の草鞋」を履いてこられたので、私も「二足の草鞋」を履いて悪戦苦闘しながら研究生生活を送ってきている。ここでは、私が関与した「社会階層と社会移動」調査に関して、私がかつとも感銘を受けた3冊の書籍を取り上げる。

移動表分析のパイオニア

『社会移動の研究』

安田三郎著

東京大学出版会 1971

648頁の大著であり、戦後の日本における社会移動研究の分野で卓越した著作の1つである。私は、1975年SSM調査がスタートした1975年、修士課程1年生の時にこの書籍を読んだ。

学部生時代に安田先生より「社会調査法」(週2コマ、4単位)の講義を聴き、修士課程1年次に統計学の講義を通年で聴いていた。このように安田先生と接点があったにもかかわらず、1975年に読んだ時には、この書籍の偉大さを私は理解することができなかった。この書籍は全4章からなり(正確に記すと、序論的な0章と、要約の5章がある)、「1. 方法論的考察」、「2. 社会移動の構造」、「3. 社会移動の意識」、「4. 社会移動と社会的態度」という構成

である。構成自体はシンプルであり、社会階層と社会移動研究の王道をいく構成である。すでに多くの書評がなされているので、「屋上屋を架す」ような表現になるが、この書籍のとりわけ秀逸なところは、第1章と第2章である。

ところが修士課程に入学した頃の私は、社会移動表(とりわけ世代間移動表)の分析にまったく関心がなかったので、第1章および第2章の素晴らしさが微塵もわからなかったのである。第1章では、結合指数と分離指数を出発点にして、さまざまな指標を検討した上で、開放性係数(Y係数)の提唱がなされているのであるが、この第1章の迫力と素晴らしさに気づくのは、それから10年後、1985年SSM調査に関与しながら、大学で社会移動に関する講義で、社会移動表に関する指標を取り上げた時であった。講義ノートを作成しながら、さまざまな指標を吟味しているうちに、開放性係数(Y係数)がいかにすぐれた指標であるかに気づかされたのであった。数式をフォローしているだけでは、どの指標がよいのかわかりづらい。しかるに実際にデータをあてはめてみることによって、指標の効能が実感できることを教えられた。第2章では、社会移動の分析が個別テーマごとになされており、「2.2社会移動の国際比較」をはじめとして卓抜な研究が展開されている。

安田先生の文体は、きわめて論理的であり、感情を抑制したものである。読者をその気にさせて共感させるような文章ではなく、数字で語ることを徹頭徹尾貫いた文章である。私が受講した統計学の講義でも、黒板に書いた数式の展開がうまくいかなくなると、黒板をみてじっと考えはじめるような先生だった。そのような文章であるがゆえに、10年の間において2回目に読んだときに、私はやっと理解できたような気がする。しかし、この書籍に通底するのは、機会均等のもとでの社会移動(正確には純粋移動)の増加こそ、のぞましい社会の姿だとする安田先生のエートスであり、このエートスこそ私たちが読み取るべきものであろう。



高度経済成長と社会階層

『日本の階層構造』

富永健一編

東京大学出版会 1979

この書籍は、1975年SSM調査の分析結果をまとめたものである。この書籍が画期的なのは次の2点である。第1に、戦後日本の高度経済成長が終焉を迎えつつあった1975年になされた調査であり、1955年から1975年へと至る20年間の日本社会の変動が、社会階層と社会移動にいかなる影響を与えたかを明らかにしていることである。第2に、大型コンピューターの普及によって統計分析が容易になり、パス解析、クラスター分析などの多変量解析が用いられていることである。この第2の点については、1975年SSM調査で用いられた統計分析の手法が、その後の社会調査データの計量分析の嚆矢となったと言っても過言ではあるまい。編者の富永先生が、当時40歳代で、他の執筆者がすべて20歳代、30歳代という若さであったことにあらためて驚く。

収録された論文はすべて優れているが、特に印象に残っているのは、「第2章 社会階層と社会移動の分析（富永健一）」と、「第5章 社会的地位の一貫性と非一貫性（原純輔・今田高俊）」である。第1章は、開放性係数（Y係数）を用いて世代間移動の趨勢を分析した上で、地位達成過程についてパス解析を試みている。その結果、1955年から1975年までの20年間の階層構造の変動が明瞭になっている。第5章は、社会的地位が複数の次元から構成されていることを、地位の一貫性・非一貫性という形で視覚的に明らかにしている。そして地位の非一貫性に、「自分の地位の複数の次元のなかで、1つくらいは、中流もしくは上流のものがある、その結果、他の低い地位が新たに獲得した他の高い地位によって補償される」というメカニズムがあることを発見した点で卓越している。すべての論文が丁寧な分析をふまえて執筆されており、練られた文章であることも書籍としての価値を高めている。

1975年SSM調査当時、私は修士課程の1年生であり、調査の裏方をお手伝いしたのは懐かしい思い出である。とりわけ1976年2月の千葉県館山市でのコーディング合宿では、富永先生および小室直



樹先生と同じ和室にメンバー最年少の私が寝泊まりしたことは、かけがえのない思い出となっている。夕食後、富永先生と小室先生が、「こんなに体力があるのか」と思わせるほどに学問談義されていたことが、昨日のこのように思い出される。

解像度の高い分析

『社会階層——豊かさの中の不平等』

原 純輔・盛山和夫著

東京大学出版会 1999

言うまでもなく日本を代表する社会階層と社会移動の専門家である原純輔氏と盛山和夫氏による、1955第1回SSM調査から1995年第4回調査までの分析結果を、職業的キャリア、学歴社会、ジェンダーなどの6つのトピックを通してまとめた名著である。この書籍の優れた点は、分析結果の理解が難しいという定評があったSSM調査について「これほど簡明に論ずることができるのか」というくらい、わかりやすく記述されていることである。単純明快な図表で、データ分析の結果を説明する原・盛山氏の力量には脱帽するしかなく、「快哉」という読後感がぴったりとあてはまる著作である。刊行されて10年以上経つが、ぜひ一度手にとって読んでもらいたい書籍である。

以上、「社会階層と社会移動」調査関連で、私がこれまで感銘を受けた3冊の書籍を紹介した。私なりの感じ方を率直に記したつもりである。この小文が、社会学、とりわけ社会調査データの計量分析に関心のある方々の参考になれば幸いである。